

連載

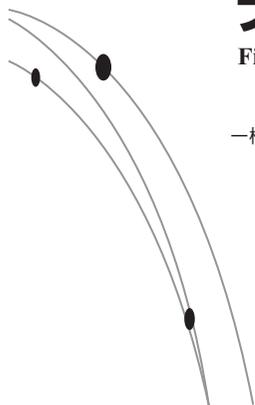
## フィールド・アイ

Field Eye

パークレーから——③

一橋大学助教授 川口 大司

Daiji Kawaguchi



### 多様な人々、多様な食事

アメリカの食事がまずいという話はひろく日本人の間に定着しているのではないか。私事で恐縮だが、ごく普通の中西部の町で4年半の大学院留学生生活を送った経験から、ステレオタイプではなくてアメリカの食事はまずいものだと思っていた。しかしながら、パークレーを含むサンフランシスコ湾を中心とした地域はベイエリアと呼ばれるが、この地域ではいろいろな国の料理を手軽に楽しむことができる。

これだけ多様な料理が食べられるということは、おそらくベイエリアに住む人々の満足度ベースで見た生活水準を上げている。おなじ予算で食事をするとして、毎日ハンバーガーを食べるより、今日はタコス、明日はカリフォルニアロールといった生活をしたほうが、多くの人よりは高い満足度を得ると考えられるからだ。ベイエリアは最近の住居費の高騰によって全米有数の物価が高い地域ということになっている。しかしながら、中西部の町からサンフランシスコの研究所に転職した私の大学院時代の恩師は、質を調整したらその中西部の町の物価は高かったと言っている。確かにおいしい韓国焼肉を食べようと思ったら1時間はドライブしないとイケなかったその町の物価は「高」かったかもしれない。

ベイエリアの多様な食文化を支える一つの柱は、地域合計約680万人の人口と、人々の高い所得である。ベイエリアの家計所得の中央値は約6万2000ドル、全米の中央値の約4万2000ドルよりずっと高い<sup>1)</sup>。巨大人口と高い所得が生み出す大きな外食需要は、多種多様なレストランの存在を支えている。大学院で留学

した先の中西部の町にはまずこれが欠けていて、その町が含まれる郡の人口は約28万人、家計所得中央値は4万1000ドルである。巨大市場の存在、これがまずベイエリアのレストランの多様性を説明する。

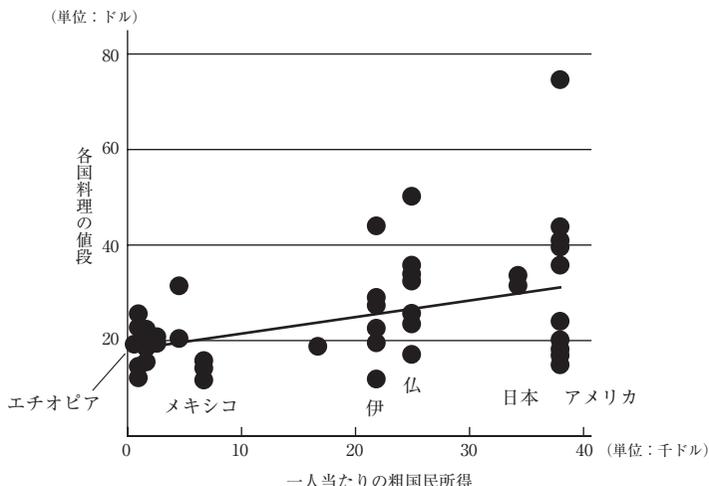
もう一つ無視できないと思うのが、外国人の存在だ。ベイエリアの人口のうち、外国生まれの者はおよそ27%。アメリカの平均の11%よりずっと高い。これらの外国人の中には飲食店を営んだり、これらの店に勤めたりすることで、外食産業の供給側に貢献する人々も多い。例えばメキシコなど賃金の安い国から移民がやってきて、メキシコ料理屋の件数を引き下げている可能性が考えられる。その結果、メキシコ料理屋は安い価格でタコスを提供しているのかもしれない。

さまざまな国からの移民がベイエリアの食文化の多様性をもたらす。この可能性を確かめるために、パークレーにおける各国料理の夕食の値段と、それぞれの国の一人当たり粗国民所得の関係を調べてみた。一人当たり粗国民所得が低い国の人々は、賃金が低くてもアメリカに移住し、結果として安い労働力の提供を通じて、その国の料理を安く提供することにつながるという因果関係が考えられるからだ。

検証に用いるデータであるが、レストランの夕食の値段に関しては、ザガット (<http://www.zagat.com>) に報告されている飲み物一つを頼んだときの一人当たりの夕食の値段の目安を用いた。ザガットはアメリカのレストランガイドとしては定評のあるもので、ここに載っていることがすでにある程度のレストランであることを意味している点には注意が必要だ。一人当たり粗国民所得については、世界銀行のWorld Development Indicator (<http://devdata.worldbank.org/wdi2005/>) に報告されている2003年の値を用いた。ザガットに載っていて、夕食の値段が報告されているレストランはパークレー市内に48カ所ある。

各国料理の値段とそれぞれの国の一人当たり粗国民所得の関係は図に報告されているとおりである。一人当たり所得が一番高いのがアメリカで3万7870ドル、そのアメリカのカリフォルニア料理を出す Chez Panisse の夕食が75ドル。一人当たり所得が一番低いのがエチオピアの90ドル<sup>2)</sup>で、そのエチオピア料理を出す Blue Nile の夕食が19ドルだ。全般的に言って、所得が上がると夕食の値段も上がっていくという関係がある。データに当てはめられた直線の傾きから、一人当たり所得が1万ドル上がると夕食の平均価格が

図 バークレーのレストランにおける各国料理の値段と各国粗国民所得の関係



3.5ドル上がるという関係があることがわかる。それほど強い関係がないのは、一人当たり所得が高い国々の夕食の値段のばらつきが大きいことが影響している。特に一人当たり所得が一番高いアメリカの料理には、ピザから洗練されたカリフォルニア料理までが入っているため、ピンキリである。しかしながら、それぞれの国の料理のうち高い部分を見ていくと（一番上の点を結んでいくと）、よりつよい右上がりの関係がある。

国民所得が高い国の料理は、食材や調理手法がこっていて、そのために夕食の値段が高いのだという意見もあるかもしれない。その効果は味に現れるはずだから、影響を取り除くために、ザガットに報告されている味の評価（0から30まで）を調整した上で、国民所得と夕食の値段の関係を見てみた。しかし、関係はあまり変わらなかった<sup>2)</sup>。

この粗い分析から確定的なことを言うことはできないが、移民の流入が、供給側の要因を通じて、食の多様性をもたらしているという可能性を示唆している<sup>3)</sup>。移民がもたらす多様性は食事に限定されるものではない。例えば、あたらしい考え方や芸術が持ち込まれるという便益も考えられる。

移民を受け入れるかどうかという話になると、単純労働者としての彼らのもたらす便益や、移民と犯罪の関係など、比較的測定しやすいものに議論が集中しがちだ。しかしながら、移民の持ち込む異質性がもたらす便益への配慮も必要ではないか。

もちろん、移民受け入れは、さまざまな制度の抜本的な改革も同時に行われないと上手くいかない。例え

ば、*The New Yorker* の記事は、最近のフランスで起きた移民による暴動をとりあげ、米国の柔軟な労働市場とフランスの硬直的な労働市場の違いが、同化の進み方の違いをもたらしたという議論をしている<sup>4)</sup>。例えば、移民大量受け入れ地域の自治体の国際交流担当部局が、質量両面で十分な人材の配置が得られず、対応に苦慮するという可能性も想像に難くない。制度の齟齬がもたらす不満は移民という立場の弱い人々に向かってしまいがちだ。結果として、これらの不満は排外主義と切り捨てられがちだが、実はその中に耳を傾けるべき意見もあるのではないか。

移民のもたらす便益を多様な観点から捉え、その費用の発生原因を現場の声から拾い上げる。雲をつかむような話と地に足のついた話の両方が移民受け入れの議論に当たっては必要ではないか。バークレーの人々の多様さと外国人に対する寛容さに感謝しながらそう思う。

1) これらの数字はすべて2000年の国勢調査の結果に基づく。人口は2000年の値、所得は1999年の値。センサス局のホームページ <http://factfinder.census.gov/> から Fact Sheet を選び、町や郡の名前を入れると、それぞれの人口、人種構成、所得、外国人比率など国勢調査で聞かれた内容の記述統計量が見られる。

2) 結果に興味をお持ちの読者は [kawaguch@econ.hit-u.ac.jp](mailto:kawaguch@econ.hit-u.ac.jp) までお問い合わせください。

3) ザガットは日本（主に東京）もカバーしているので、おなじ分析をしても面白いかもしれない。

4) James Surowiecki, "The Financial Page: No Work and No Play," *The New Yorker*, Nov. 28, 2005, p. 68.